

2017
おもろ
チャレンジ

地上絵文明と探検

経済学部 3年

大石 菜々野

ブラジル

2017年8月31日-

2017年9月21日



渡航概要と内容

今回はブラジルアクレ州付近にある地上絵文明の範囲を探る、ということで、①グーグルマップで視認できる地上絵を訪ねる→②グーグルマップでは確認できないジャングルの中の地上絵を探る、という行程を計画していた。①についてはほぼ問題なく1週間以内に遂行できた。私が今まで行った発展途上国（中国の田舎、マダガスカル、バングラデシュ）では英語話者がたくさんいたのでブラジルもそうだろうと踏んでいたところブラジルには英語を話せる人がほとんどおらずその点では苦勞もあったが、片言のポルトガル語とグーグル翻訳で何とかなった。最終的に私が滞在した町、ボカドアクレでは外国人が珍しいということで歓待してもらえたのでむしろ地上絵を訪ねるのは容易であった。

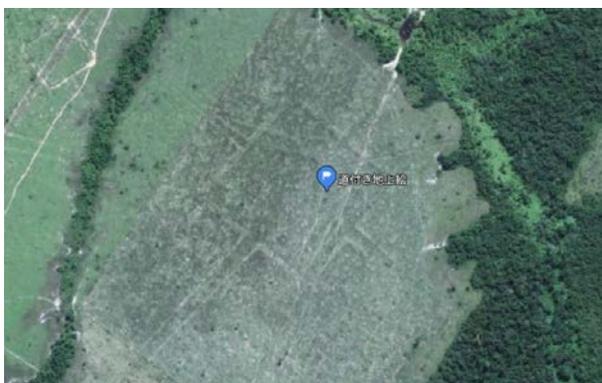
②については、実現できなかった。ブラジルのジャングルは写真で見るとよりずっと密で、また写真や映画ではわからなかった要素、虫が厄介であった。日帰りでのジャングル突入は二度行ったが、水と食料を背負っての歩きにくい地面、完全防御の服装を貫通してくる蚊（のような虫）を前に、私は早々にジャングルを探検することはあきらめた。「アマゾンを探検するなら、雨期、支流を入り込む形で」という定説には意味があったことを知った。ブラジル人にジャングルに入りたいのだというと蛇や蚊がでるからやめろ、と言われるのだが、そうすると村のぎりぎりまで車で送ってもらうようなこともできないのでそれも不便であった。

こうやって早々にジャングル探検を諦めてしまったのには、実は行く前から「地上絵文明の範囲を探る」という目的を見失っていた、という理由もある。アマゾンについては数年前から興味があり読んだ本も多かったが、考古学については今回おもろチャレンジに応募してから本格的に調べ始めた。そしてわかったのは現在はライダーというレーザーのような技術によって地上が樹木に覆われていてもその詳細な形や、さらに地中の構造がわかるようになっており、それによって遺跡をマッピングしたり新たに発見したりということが行われているということであった。従

来の茂みを分け入り遺跡を探す…というのはグランドトレースと呼ぶらしいが、ライダー探査ではグランドトレースの数十年分の成果が出せるので考古学界に革命が起きている、らしい。私がかもともとやろうとしていたことはライダー探査が有用な教科書的事案だったので、私としてもやる気を失ってしまったというわけである。また、ライダー探査が実用されていくと、「遺跡を発見」ということそれ自体の価値は下がっていき、「発見された構造をどう解釈するか」が相対的に重要視されていくのではないかと思うわけだが、アクレ周辺の地上絵構造からその役割や用途を解釈する試みは現在研究者の妄想にとどまっております、私も今回それを解明するのは無理だろう、と行く前から感じてしまっていた。実際現地へ行ってみても私が見て植生や地質が異なっているようには感じなかったので、諦めた。

地上絵の搜索を諦めた後は、滞在していた町、ボカドアクレからさらに川を遡った奥の村がマイナー宗教の聖地になっているというので訪ねた。しかし、シンクレティズム的なものを期待していったものの、その宗教の目的はアヤワスカという幻覚作用のある植物（アマゾン諸民族のシャーマンが昔から使ってきた植物で、ブラジル政府公認）を使用することで、権威付けにキリスト教のモチーフを使っている程度であった。崇め奉る対象もアヤワスカで、雰囲気としてはカウンターカルチャーに近かった。

最後に、苦労したことについて追記しておく。実はこの宗教の村へ行くとき船代として相場の5倍ほどもぼったくられたのだが、こういうことや「ジャングルは危ないぞ」などとやたらに心配してくれるブラジル人がいる、ということの根は一つだと思う。つまり、私が「単独、外国人、若い、女」だからだということだ（計画書には三人と書いたが一人は金銭的都合で抜け、もう一人とは意見が合わずブラジルへは一緒に行ったものの別行動となった）。そういった属性のおかげで心配してもらえる時もあるが、「ちょろそう」という印象にも繋がるのでぼったくられたりセクハラをされたりすることにもなる。こういったトラブルは日本とは違う国だから起こったというよりも（これらは日本でも出会う出来事である）、言語がわからずGoogle翻訳などを介してのコミュニケーションだと母語ならわかる言葉の性格やニュアンスがわからないので、事前にリスクを察知して避けることが困難であるからだと思う。単独で旅をする際には特にそのことに留意しておくべきだと思う。



左の画像はグーグルマップから取得したもので、画像左上と中央に地上絵らしきものが確認できる。右は実際の地上絵。溝が残っているのがわかる。

■ 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

実際に渡航しないとわからないことがわかってよかった。具体的には土地のスケール感、電波状況、ブラジル人の英語習得具合、ローカルの移動手段などの知識は次回の渡航に大いに役立つだろう。

一方今回の旅では「探検とは何か」ということも考えさせられた。衛星技術の進化した現在、地図上に地理的な空白は存在しない。もちろん中国が政治的理由でGPSをいじっているので云々という空白は存在しないわけでもないが、技術的に地図を作れないわけではない。人類未踏という場所は残っているが不屈の精神や強靱な心身、良質な組織、あるいはそのすべてがないと到達するのは難しい。わたしのような運動神経皆無で体力もなく精神も弱い人間としては学術探検を行うことで心を満たしたいと思うものだが、新奇なテーマを見つけることは難しい。私は今学部のゼミで論文を書き進めていて、一応「新しい」ことを書くのは可能だが、驚くべき結果ということではない。こういった路傍の石を拾うような作業にいかほどの意味があるのかと思う。あると予想される場所にそれがあつたとして、何の意味があるのか。こういったことを打開して道を切り開くためには結局勉強を積み重ねるしかないと思うのだが、それを再度心に刻むことができた旅だった。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

私は来年一年休学することに決めており、なにか探検的なことがしたいと思っているのだが、そのプレとして有用なものとなった。ブラジリアマゾンでは来年もう一度トライしたいと思っているが、①雨期のほうが良い、②カヌー技術の習得が必要、③ポルトガル語の習得が必要、④藪漕ぎなどによる歩行技術の習得が必要、など様々な知見が今回得られたのでよかった。その一方、ライダー探査が実用されている今、グランドトレースは徒労であるという事実があり、ブラジリアマゾンで学術探検をしたいなら新たなテーマを設定する必要がある。

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*移動費

*宿泊費・食費

*予防接種

*通信費

*その他雑費など